

令和 元年 9月 2日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880100

氏名 青山 忠申  
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先：都市名 サンクトペテルブルク (国名 ロシア)
2. 研究課題名(和文) : 中世ロシア語文献におけるアクセントに関する文体的研究
3. 派遣期間：平成 30年 9月 1日 ~ 令和 元年 8月 20日 ( 354日間)
4. 受入機関名・部局名：ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

#### 研究内容

本研究は、中世ロシアで執筆された文献においてアクセントという要素はテキストを分析する際の文体的指標として機能し得るものであると論証することを目的とする。その対象として、17世紀後半に書かれた『アヴァクム自伝』を選択した。本研究では文献の作者による恣意的なアクセント選択を仮定している。これは、規範的なアクセントから逸脱した例の存在が前提となっている。また、同一文献内にアクセントの揺れが見られる場合にも、そこに意図が介入している可能性を指摘できる。『アヴァクム自伝』の自筆写本においてこうした特異なアクセントの例が頻出することから、この文献は本研究の分析対象として適していると判断した。

#### 研究状況

現存する『アヴァクム自伝』の二つの自筆写本を比較していく中で課題が浮上した。それは、より早い時期に書かれた方の写本のアクセント標示に別人の筆跡が認められることである。その課題の解決のために、筆跡学を研究しているサンクトペテルブルク大学のD.O. ツィプキン氏の協力を得、専門家の指導の下で当該文献におけるアクセント記号の筆跡の判別を行った。また、全般的な傾向として文献著者アヴァクムによる例外的なアクセントの発現には詩的リズムの形成が少なからず関わっていることを発見し、これに関する成果を2019年4月にモスクワ大学で行われた国際学会にて発表した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ロシア文学会研究発表会にて、『アヴァクム自伝』を収録する文集の筆跡調査等に基づいた当該文献の執筆環境に関する発表を行い、その内容をまとめた論文を『ロシア語ロシア文学研究』に投稿する予定である。そのほか、『アヴァクム自伝』の自筆写本と後世に書写された二写本の系統関係に関する文献学的調査の成果をロシア文学研究所にて発表することを予定している。

今回派遣先においては、主に『アヴァクム自伝』の写本に見られる複数の筆跡の解析、後世写本との系統関係やアクセント異同の調査といった、主要研究テーマの論旨を補強する分野の研究を遂行した。今後は、筆跡調査の結果等を踏まえた上でアヴァクム個人のアクセントについての分析を進めていく。現時点では『自伝』におけるアクセントの逸脱に対しては詩学的要素の影響が大きいと考えているが、それ以外の、例えば統語的あるいは文体的要因に関しては更に慎重に整理・検討していく必要がある。また、『アヴァクム自伝』の研究の中で提起した「文献執筆者による主体的なアクセント操作」という概念は、他分野の作品にも適用可能かどうか検証しなければならない。アヴァクムと関わりのある古儀式派の口伝伝承などでは、『自伝』と類似したアクセント特徴の出現が期待できるかもしれない。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムによりロシアに長期滞在したことで、何よりもまず研究対象としている文献の実際の写本を直接参照することが可能になり、理論面ではなくより現実に即した課題を解決する重要性が認識できた。それまでは刊行された写真版を資料として用いていたが、現物を見なければ写本上の複数の筆跡について詳しく検討することは叶わなかった。

研究生生活を続けていく上では、ロシアの研究者との交流を持てたことが大きな利点となっている。中世ロシア文学研究の中心地であるロシア文学研究所では週に一度、一名の研究者による口頭研究報告があり、毎回様々なテーマについて行われる発表を聴き、ロシアにおける当該分野の研究動向を知ることができた。同研究所の O. V. パンチェンコ氏や N. V. ポヌィルコ氏には『アヴァクム自伝』の文献学的研究に関する有益な助言を多数受けた。同じく A. G. ボブロフ氏とは共同で 16 世紀の福音書、祈祷書の写本 2 点の書誌学的記録を作成する貴重な機会を得た。また、中世ロシア史を専攻するサンクトペテルブルク大学の学生達と交流することがあり、彼らの研究に対する真摯な姿勢と深い専門知識に非常に刺激を受けた。

自分の研究内容を客観的に見つめ直すことができたことも、本プログラムに採用されたからこそである。日本国内では同様の分野の研究者が極めて少なく、自身の行っている研究の学界における位置づけが知覚される機会があまりなかったが、ロシアの中世ロシア文学研究者の問題意識や関心を知り、ロシアと日本それぞれにおけるこの研究への評価を比較することができた。派遣先での経験は、今後の研究の方向性を固める上でも重要なものになっている。